

〔第24回 学術集会フロントランナーズシンポジウム〕

## 育成期家族を地域で支える —子どもと家族が笑顔でともに生きるために—

千葉県立保健医療大学

(座長) 北川 良子

本シンポジウムでは育成期家族を地域で支えている3名のシンポジストより、実践内容と課題等についてご提言頂いた。

保育士が実施する「認可外保育園」における親子支援では、長期に渡り保育士として育成期家族の支援を実践されている、認可外保育園ファミリー保育室所長の村上トメ子氏よりご提言頂いた。シングルファザーやシングルマザー、日曜祝日も就業している両親など認可保育園の保育では難しいケースへの支援の実際について紹介があり、子どもとその家族が望む手の届くきめ細かい支援の積み重ねが重要であり、その積み重ねが子どもの幸せにつながると提言された。

「こども食堂」を通じた子どもの「暮らし・遊び・学び」の支援について、「子どもの貧困」をテーマに地域の子どもの地域で見守り育てることをコンセプトとして活動されている、NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク理事長の栗林知絵子氏よりご提言頂いた。プレパーク、無料学習支援、子ども食堂など子どもの居場所を点在化して子どもと家庭への支援の実際について紹介があった。子どもだけで参加できる子ども食堂は、孤立しがちな親子や子どもの居場所であり地域で困らんの場を作るため場として開始されたが、その活動から食事だけではなく遊びや学びの支援の必要性を実感し、活動の場所と内容を拡充させた現状とその課題について提言された。

中核地域生活支援センターの個別相談支援と地域づくりでは、NPO法人長生夷隅地域のくらしを支える会、長生ひなた所長の渋沢茂氏よりご発言頂いた。育成家族に対する福祉サービスの提供に関わる援助および調整等を行うとともに、相談者に対する支援計画等の策定などの活動の実際についてご紹介頂き、中核支援センターの相談活動には明確な「ゴール・目標」がないこと、あらかじめ決められた「権限」がないこと、逆にこれはやってはいけないという「制限」がないため、活動上の困難も多いことが紹介され、支援を必要としている育成期家族や地域の関係者との関係性の構築を重視すること、結論を急がず弱い人の立場に立つことを重要視することを念頭におき、活動する上ではケースごとのきめ細かい個別対応が重要であるとの提言があった。

シンポジストと会場参加者間では、育成期家族を地域で支えるために看護職と地域の連携についてディスカッションが行われた。看護職として貧困などで支援の手が必要な育成期家族の存在とその現状を知ることと、医療現場で子どもの貧困による問題が発見した際はご発言頂いたような社会資源があることを紹介すること、育成家族を支えるためには行政との連携が不可欠であることなどがディスカッションされた。本シンポジウムを通じて、育成期家族を支えるために看護者が地域とどのように連携していけばよいのか、看護職として大変貴重なヒントを得ることができたシンポジウムであった。